

ライマン・コレクションとの出会い

副見 恭子¹⁾

ひょんな事から、ライマンコレクションに巡り会った。今から十年余り前の出来事である。1979年10月1日の日記を見ると、コレクションの出会いをジョン・ポール法王に謝すると記している。出会いの発端は、1ヶ月前の9月11日と言ってよい。美術商をやっているご主人が、プロビンスタウンで古い家を買取り、屋根裏ではこりを被った浮世絵を見つけたから是非みてくれと友人のミセス・ゼントルが三つの作品を持って来た。歌麿・豊国・国芳である。その家の持主の父は、アンブローズ・ウェブスターと言い、マサチューセッツ州では二十世紀の初め、かなり名が知れた画家だった。プロビンスタウンは、有名なメーフラワー号がプリマスに上陸する前停泊した処で、大西洋を望み、風光明媚な町である。そのせいか二十世紀の初期、芸術家達でにぎわった町であった。浮世絵は、ウェブスターが十九世紀の末パリで絵の修行をした折手に入れたものらしい。歌麿の遊女のなまめかしさにすっかり心を奪われた。それと共に、何時もの素人判断はいけなと思った。フォーブス図書館へ行って調べてみようと思ったのは、興奮がさめてからである(写真1, 2)。

フォーブス図書館に目を見張る程の珍書稀書があるのは、所在地のノースハンプトン市に負うところが大きい(写真3)。当市には、アメリカ第一の女子大学スミス大学がある。近くには、新島襄や内村鑑三が学んだアマースト大学や、アメリカ最高の詩人エミリー・ディッキ

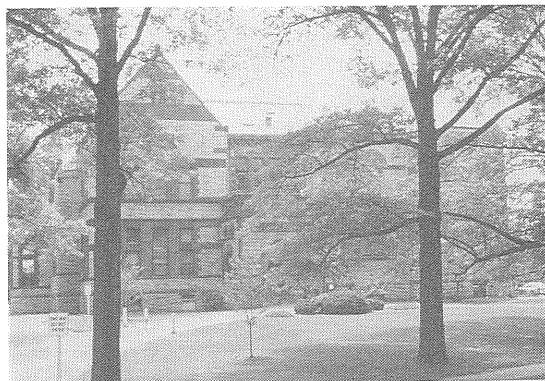


写真2 フォーブス図書館の側面。緑豊かな町の中の品の良いシックな建物が印象的。

ンソンが一生を過ごした家がある。アマーストは、汽車を利用すればボストン、ユール大学があるニューヘブロン、ニューヨークへも容易に行くことが出来た。ボストンに比べ、サイズに大差があるにもかかわらず文化・学術では決して引けをとらない。フォーブス図書館で浮世絵展示会があったのを新聞で読んだ記憶があったので、フォーブスの歌麿を参考にしようと思ったのである。

お休みの土曜日にフォーブス図書館に出かけたが、美術担当の司書は週末は休みだと言われ、さてどうしようかと考え込んだ。仕事を休んで訪れようかと思っていた矢先、天から朗報が降って来た。ジョン・ポール法王がボストンを訪問されるので、10月1日月曜日は、私の勤務している大学はお休みだとわかった。

先ず当日、市立図書館は開館しているのを確かめた。この棚ぼた休日をフルに利用しようとして自動車の修理から髪の設定まで、ぎっしりスケジュールにつめこんだので、フォーブス図書館に着いたのは午後だった。美術司書のミスター・ダニエル・ロンバートは、実に誠実親切な紳士で、浮世絵を次々ブックカートに積んで時間をかけて披露して下さった。後でこの大部分は、ライマンが日本から持って帰った浮世絵であることを知った。

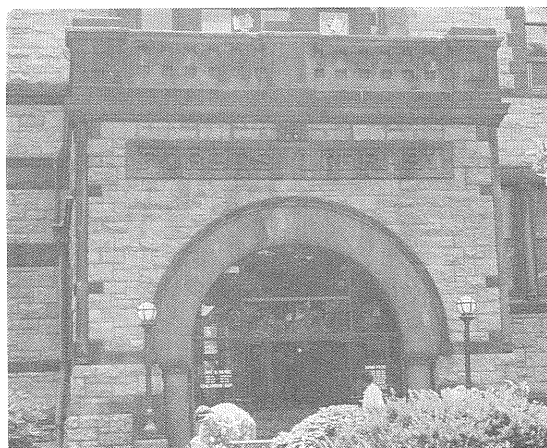


写真1 ノースハンプトンにあるフォーブス図書館正門入口。

1) マサチューセッツ大学顧問

キーワード：お雇い外国人，図書館

8 Eaton Court, Amherst, MA 01002, U.S.A.

さて最初に「ひょんな事から」と書いたが、「ひょんな事」も裏を返せば糸口がある。ライマンコレクションとの出会いも例外ではない。マサチューセッツ大学図書館が、新しく東洋図書コレクションを設立するため日本人司書を求めているので応募した。1972年採用通知が来た時は、職名がカタログ編集者となっていたので、ためらった後受理した。ライマンすぐろくのふり出しで、サイコロをふったに等しいと今になって思う。三千冊以上の和漢両書籍の目録カードを作る新しい仕事があった。一年たつと、周りの様子がわかって来る。現在でもそうかも知れないが、1970年代までは、アメリカの大学図書館で東洋関係の仕事をする場合、三つの条件を切に願ったものである。図書館幹部の東洋に対する関心・理解、及び人間として一流人物であるかどうかである。大学時代中国書誌学のコースをとったアメリカ人の助教授が東洋図書の仕事を昇進の道具にし、勢力を伸ばそうとしているのに気づいた。図書館側は、東洋図書は興味なし、理解しようともせず、教授達については「触らぬ神に祟りなし」主義をとっている。破廉恥極まりない人物に一人で向かっていくには、忍耐・勇気・知謀、それにコンパッションに頼るしかない。一步一步土俵の上で進み、挑戦し、ついに東洋図書の予算を中国と日本に等分し、すべての図書の仕事は私を通すよう約束させた。背水の陣の心構えをしてから三年余り過ぎていた。私が「小規模でも最高のコレクションを作るべきだ」と力説したからだろうか？又は過去五年間、中国の本に東洋図書予算の大部分を費やしていた引け目からか？或日「この地域の図書館に古い日本の書籍が保存されているのを聞いたことがある」と助教授がぼろりに言った。何処で何と言う図書館かもわからない。風説の様にもとれた。しかし「よし、探し出してみよう」と私は自分に誓った。1977年の秋だったと思う。

すっかり暗くなり、激しく雨が降り出した。国芳と豊国は本物と思うが、歌麿はニューヨークへ行って鑑定する様に結論を下した。美術司書へお礼を言った時である。電光が頭の中を横切った。「もしかしたら、この図書館に、古い古い日本の書籍が保存されていないでし

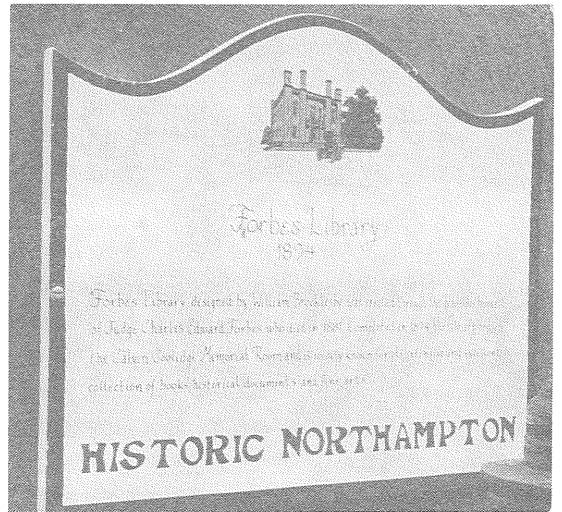


写真3 フォーブス図書館正門わきにかけられている記念板。チャールズ・エドワード・フォーブス判事の遺産で建てられたこと、ウィリアム・ブロック・レスビーによって1894年に完成されたこと、カルビン・クーリッジ記念室に彼の本、歴史的な文書、美術品の膨大な優れたコレクションがあることが記されている。

ょうか？」とすぐにミスター・ロンバートに尋ねていた。「ええ ありますよ」彼の答はいとも簡単だった。「どの位古いです？ 戦前ですか？」「いやいや もっと古いです。十八世紀かな？」。短い劇的な会話だった。

再訪を約した後、フォーブス図書館を出たのも、車を修理場に出したのでバスにのったのも覚えていない。アマーストに着き、ノース・イースト・ストリートへ行く次のバスが来ないので、雷と雨の中を歩いた。傘をさしていたものの、ずぶぬれになりながら長い道を夢中で歩いた。冷やかな雨が高ぶりを徐々にさましてくれ、むしろ気持ちはさわやかであった。

その後、いろんな人々の親切な救いの手を受けてライマンコレクションがマサチューセッツ大学に購入されるまで、8年程の障害苦難が待っているとは夢いささか思わなかった。

<受付：1990年2月28日>